

図書館だより

Library News No.66

Nara National College of Technology

2009年2月 奈良工業高等専門学校図書館発行



絵：4I 中川 雄貴

目次

巻頭言『アウシュヴィッツを訪ねて』	2
『竜馬が行く』から始めた読書習慣	3
平成20年度読書感想文コンクールを終えて	4
読書感想文入賞作品紹介	6
学生会図書委員によるブックガイド	15
図書委員会活動報告	16

巻頭言

『アウシュヴィッツを訪ねて』

一般教科主任 桐川 修

昨年の夏、ドイツ国内で開催されるドイツ語教員研修に参加する直前の約1週間、隣国ポーランドを旅してきました。その目的のひとつがオシフィエンチム Oświęcim を訪ねることでした。皆さんはこのポーランド語の地名はおそらく聞いたことがないかもしれませんね。でもドイツ語名アウシュヴィッツ Auschwitz と聞けばどうですか。そうです、かつてこの町には第2次世界大戦中ナチスドイツの『ユダヤ人絶滅計画』を実行した強制収容所、つまり絶滅収容所がありました。現在、収容所があったところはアウシュヴィッツ＝ビルケナウ国立博物館として一般に公開されています。



ナチスドイツは1933年に選挙を通じて合法的に政権を獲得すると、ただちに反対勢力の強制排除に乗り出しました。そしてドイツ国内にこれらの人々を収容するための施設、すなわち強制収容所をつぎつぎに建設します。さらに反ユダヤ主義を標榜していたナチスはユダヤ教徒などのユダヤ系住民を迫害していきます。39年ナチスドイツはポーランドに侵攻し第2次世界大戦が始まりますが、これ以降45年の終戦までポーランドはナチスドイツの占領下となります。そしてこの地にも強制収容所が作られ、反対勢力の人々だけでなく、ドイツ国内や占領地に住むユダヤ系住民などが大量に収容されることとなります。当時ヨーロッパにはおよそ1,100万人のユダヤ教徒などのユダヤ系住民が暮らしていたのですが、42年ナチスドイツはこれらの人々の処遇の『最終的解決(独: Endlösung、英: Final Solution)』として彼らを絶滅させる計画を立て、ただちに実行に移していきます。この目的のための最大の施設として建設されたのがアウシュヴィッツ＝ビルケナウ強制収容所でした。ナチスは政権を握ってからドイツ敗戦までの12年の間におよそ500～600万人のユダヤ系住民やロマ(=ジプシー)などを虐殺したと言われていますが(一般にこれはホロコースト Holocaust と呼ばれています)、そのうちこのアウシュヴィッツ＝ビルケナウの収容所では100万人以上の人たちの命が奪われたとのことでした。

人類の犯した最も残虐な行為を後世の人々に伝え、二度と再び繰り返させないように、との思いで、現在ではポーランド国立の博物館としてここには当時のたくさんの資料が展示されています。1979年には『人類の負の遺産』ということでユネスコ世界遺産にも登録されました。

広大な敷地に点在する建物や廃墟をひとりで巡ることはとても無理なので、ガイドをお願いすることにしました。実はこの博物館にはただひとりの外国人ガイドとして日本人の中谷剛さんがおられます。『アウシュヴィッツ博物館案内』(2005年、凱風社)や『ホロコーストを次世代に伝える』(2007年、岩波ブックレット)という本も出されている方で、われわれ日本人としてアウシュヴィッツをどのように捉えればよいのか、一緒に歩きながらお話をうかがうことができました。そして2時間あまりかけてひととおり案内していただいたあと、別れ際に「日本からももっとたくさんの若者に来て欲しいんです。」とおっしゃったことが印象的でした。世界中からやって来た多くの若者が、数十年前におこなわれたおぞましい人類の歴史と向き合っている中、日本の若い人たちも同じ体験をすることによって真の『国際化』を果たしてほしい、との思いだったのでしょう。皆さんにもぜひ一度見学してほしいと思います。

(中谷さんの2冊の本は図書館にも入っていますので、実際に手にとって見ることができます。)



“『竜馬が行く』から始めた読書習慣”

物質化学工学科 亀井 稔之

『竜馬が行く』。言わずと知れた司馬遼太郎の大ベストセラーであり、この本を手にしたことのある方は多いと思う。私は、高校時代は本当に本を読まない学生であった。大学1回生の夏休みくらいであっただろうか。さすがに本を読まないのはどうであろうかと思い、読書を始めてみようとしたのがこの本である。なぜこの本であったかという、ただ自分が日本史、特に幕末が好きだったからである。おそらく好きな分野の本でなければ、途中で飽きると思ったからである。この本をきっかけとして、大学時代はいろいろな本を読み、読書習慣が身に付いた。研究室に配属されてからは専門書がメインとなって読む冊数は減ったが、読書習慣があったことが研究活動にプラスに作用したことは間違いない。もし、あの時本を手にとってなかったら、専門書を読むのも億劫となっていたら、今の私はないだろうとも思う。メディア委員会(図書関係)の仕事をしていて思うことだが、高専の学生は本当に本を読んでいると感じる。しかし、自分の学生時代と同じ境遇の人もあるであろう。振り返ってもそう思うが、読書を始めるのはなかなかハードルが高いものである。だからこそ、一冊目の本が非常に大事である。最初は興味のあるものから始めるのが一番である。最初の本が難しいものだと、そこで読書の歴史は終わってしまうのだから。期末試験が終わったあとにでも、何か興味のある本を一冊手にし、読書を始めてみてはどうか。それは、自分がもう少し早くから色々な本を読めばよかったと思う後悔の念からの勧めである。



多読表彰について

図書館では、毎年、4月から12月までの統計結果に基づき、1人あたりの貸出冊数が多かったクラス・専攻を表彰することになっています。今年度は下記のクラス・専攻が受賞しました。

第1位	化学工学専攻1年	(34.33冊/人)
第2位	機械制御工学専攻2年	(34.11冊/人)
第3位	機械工学科4年	(33.41冊/人)
第4位	機械制御工学専攻1年	(28.15冊/人)
第5位	電子情報工学専攻1年	(23.58冊/人)

授賞式は1月8日(木)昼休みに校長室にて行われました(次ページの写真をご覧ください)。

なお、副賞は各クラス・専攻での希望図書購入の権利です。来年度も学生の皆さんが図書館を大いに利用してくれることを期待しています。



平成20年度

読書感想文コンクールを終えて

情報メディア教育センター運営委員会

毎年行われてきた本校の読書感想文コンクールも、今年で第33回を迎えました。応募作品は331編ありました。その中から、情報メディア教育センター運営委員会（6名）と国語科の先生方（3名）が慎重に選考し、次のように10名の入選作を決定しました。この結果については、1月8日の全校放送でもお知らせしましたが、惜しくも入選とはならなかったものの、選考の過程で佳作として特に優れた評価を得た24名の諸君の氏名も併せて、あらためてここに紹介し、彼ら・彼女らの栄誉を讃えたいと思います。

最優秀賞

該当なし

優秀賞

電子制御工学科	1年	浅田 拓斗	芥川龍之介の原点
情報工学科	1年	魚谷 果那	ICO -霧の城-を読んで
情報工学科	1年	辻 郁奈	「モモ」を読んで
物質化学工学科	1年	加藤 豊	「西の魔女が死んだ」
物質化学工学科	1年	笹治 万樹	無くならない戦争、忘れられゆく戦傷
機械工学科	2年	内宮 拓郎	「世に棲む日日」を読んで
電気工学科	2年	合澤 和之	「老人と海」
電気工学科	2年	西村佳那子	「夢をかなえるゾウを読んで」
情報工学科	2年	里中沙矢香	「キセキ」を読んで
情報工学科	2年	山口 浩基	「ICO」を読んで

佳作

1 M 岩本翔太郎	1 M 関 悠介	1 E 石井 甲人	1 E 垣内 純
1 E 東出 竣司	1 S 加藤 大真	1 S 光崎 将人	1 S 西川 和
1 S 水口 晴歌	1 I 井上 絢香	1 C 松本明日香	1 C 中野 雄太
2 M 井上 創作	2 M 遠嶋 綸	2 M 松井 弘樹	2 M 吉川 大貴
2 E 秦 恭史	2 S 松永 拓也	2 I 上田 健太	2 I 宮田 拓実
2 C 大林 千紘	2 C 竹内 大貴	2 C 田中 利奈	3 M 辻本 結花

入選された皆さんに、もう一度おめでとうをいいます。佳作に選ばれた皆さんも、本当によく書けていました。それからここに選ばれなかった人たちも含めて、このコンクールに参加してくれた皆さん全員に、ありがとうとごくろうさまをいいたと思います。

さて、以下に入選作のいくつかについて、私自身が票を投じた作品を中心に、コメントしてみたいと思います。

まずは、2 E 西村佳那子さんの「夢をかなえるゾウを読んで」から。西村さんの文章は、重くなりがちな内容を少し軽めに読めるように工夫されていて、自ずとその文学的力量が押し量られます。冒頭から一気に話の中心を鷲づかみにして提示、さっと話題を転じて「面白すぎる」けれど「面白いだけではない」この本をなぜ自分は選んだかの説明、で気がつくと、主人公であるガネーシャという神様や「僕」の性格設定まで、すでに的確に紹介し終えている。上手いなあ。内容紹介も要となる最少の例に絞って最大の効果を上げるなど、感想文のツボを心得た読ませる文章が続くのですが、西村さんは、本の中の話題をそのまま紹介するだけでなく、自分の身の回

りのものや実際の生活の中に同様の例を見つけて、それを併せて示してくれるので、とてもわかりやすい。それはまた、彼女が本当に自分自身の問題としてこの本を読んでいる、ということ^{あか}を証してもいます。きりっとした結びの文章もいい。それが本当に行動となると、ガネーシャはきっと彼女の隣にいるのではないでしょう。

次に、2 I 山口浩基君の「『ICO』を読んで」。山口君は、ゲームを原作としてノヴェライズされたというこの作品の、宮部みゆきらしさ（と彼が考えるもの）を、特長としてしっかり掴み^{つか}とっています。彼がこの本を読む前に耳にしていた抽象的な評価の言葉、つぎに話の途中までの簡単なあらすじ、やがて全体を構成する四つの章のそれぞれの内容へと説明が進んでくると、さすがにこの小説の輪郭がはっきりしてきます。そして山口君自身がいちばん印象に残ったというセリフが紹介される頃には、私たちもイコとヨルダの独特の心の通わせあいや彼らの最後まで挫けない脱出行から目が離せなくなっているといった次第です。これは読んでみなくては。

そして、2 E 合澤和之君の「老人と海」です。合澤君が選んだのは、いわゆる名作。感想文に名作を選ぶのには、勇気が要ります。自分らしい感想を自分らしい言葉で残すことが、簡単ではない。合澤君の挑戦は果敢です。「老人と海」で感想文を書くのが三度目というのも驚きですが、さらに、このたび改めて読んだときにもやっぱり「気づけば目に涙がたまっていた」というのですから、これはもう羨ましい^{うらや}かぎり。大切なのは、合澤君が実際そうしているように、本を読んで何か自分が気づいたことがある、それはいったい何なのか、「いつかそれがわかる日がくればいい」と思って、（放っておくのではなく）とりあえず今もっている力を振り絞って、それを何とか言葉にしてみようと試みることではないでしょうか。私たちがいつか、孔子のように自分の天命を知ることがあるとしても、こうした努力の積み重ねがあってはじめて、可能になるのだらうと思います。

決められた字数まで、あと残り少なくなりました。1年生で入選した人の作品は、どれも将来性を感じさせるもので、2年生の入選作にも決して引けをとらないものばかりです。ここでは来年のコンクールへの期待を込めて、ちょっと高度な要求になるかも知れませんが、要望も書いてみます。

芥川龍之介の人間心理についての深い洞察をその「原点」として読んでいる1 S 浅田拓斗君には、「人間とは」という問題を「心理」の先のところまでさらに深く掘り下げた読み込みを、作品のテーマを捉えて表現する後半になるとびたっと照準が定まった「ICO -霧の城-を読んで」の1 I 魚谷果那さんには、前半に自分が捉えたそのテーマに沿った形でメリハリをつけた内容紹介を、紹介部分に感想部分を配分よく交えて上手にまとめた「モモ」の1 I 辻郁奈さんには、自分自身により引きつけた問題把握とそこから得られる身近な具体例を、すでにかんりの手練れに見える「西の魔女が死んだ」の1 C 加藤豊君に注文を付けるとすれば、「自然にとけこむ」と「自分で判断できる精神力」との関係についてもう一歩つっこんだ考えを、冷静な分析力と熱い心をもつ「無くならない戦争、忘れられゆく戦傷」の1 C 笹治万樹君には、自分が読んで心を動かされたその本を他の人も実際に手にとって読んでみたくなるような工夫を、それぞれ求めたい。

来年度のコンクールも今年度以上の力作を期待しています。

(国語科・武田)



読書感想文入選者と多読表彰クラス代表の皆さん（校長室にて）

読書感想文入賞作品

『鼻』
芥川 龍之介 著

芥川龍之介の原点

1S 浅田 拓斗

ほくは芥川龍之介の代表作「鼻」を読んだ。それによって、文学作品の見方が変わった。芥川龍之介に変えられたと言ってもいい。

ほくは今まで文学作品を進んで読んだことはなかった。文学作品は当時の社会に生きる人を対象としていて、現代のほくが読んでもわからないと思っていたからだ。だが、先日「羅生門」を読む機会があり、現代を風刺しているかのような内容で驚かされた。そして、芥川龍之介にとっても興味がわき、また読みたくなった。そこで、芥川龍之介が教科書に載るような偉人になるキッカケ、夏目漱石に評され一躍有名となるキッカケ、芥川龍之介の原点である「鼻」を手にした。

この物語は主人公である、鼻の長い僧がその人並外れた鼻に悩むという物語である。まず、はじめに思ったことは人物の特徴がとてもうまく表現されているということだ。例えば、長い鼻というのも細長い腸詰めのような物と、想像しやすく説明されている。もちろん、それは風景にも言えることで一度も見たことがなくても頭に浮かんでくるようだった。悩んでいる様子もまるで自分のことのように感じるくらい鮮明にかかれた。

悩んでいるのだが、自分が自分の鼻を気にしていることを周りに悟られないよう強がっている様子はなぜか共感できた。そこでこれは誰もが持っているコンプレックスを表しているのではないかと思った。当時から変わり者と言われていた芥川龍之介自身も自分を重ねていたのだろう。

そんな最中、長い鼻を短くする方法があるという朗報が飛び込む。とてもうれしく、食いついてでも欲しい情報なのに周りを気にして、僧はそんな時でも強がっている。その様子にも不思議と共感できた。にわかに信じられない方法だったが試してみると見事に鼻は人並み程度に短くなった。喜んだ僧だった

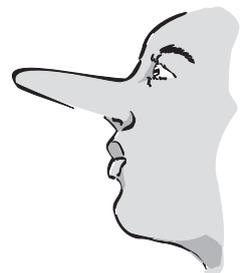
が二、三日すると周りの様子がおかしいことに気づく。鼻が長かった昔も笑われていたのだが今も笑われているのだ。それも、一層おもしろそうに。見慣れた長い鼻より、見慣れない短い鼻の方がおもしろいといえばそうである。だが、そこにはまだ理由があるらしい。そこから、僧の悩みがまた始まった。

ここで、芥川龍之介の意見が入る。他人の不幸に同情しない者はいない。ところが、その人がその不幸をどうにかして切り抜ける。すると、今度は自分が物足りなくなり他人を不幸に陥れてみたいような気になる、というものだ。この言葉には度肝を抜かれた。芥川龍之介はここまで人の心を理解しているのかと。ほくはこの言葉を認めたくはなかった。なぜなら、この言葉は人が人の不幸を喜んでいることになるからだ。だから、認めている芥川龍之介に度肝を抜かれたのだろう。

周りの人は僧に対しこの気持ちをはたらいていた。僧は悩んでいるうちに短くなった鼻が恨めしく嫌なった。すると、ある朝、鼻は短い鼻から昔の長い鼻に戻っていた。

「こうなれば、もう誰も笑う者はいない」と、僧は晴れ晴れした気持ちになった。

ほくはこの僧は元に戻っても笑われたと思う。でも、きっと僧の晴れ晴れした気持ちは変わらなかったとも思う。芥川龍之介の作品には余韻を残す作品が多くある。それは作品を読者に委ね、自由な発想で自分の作品を楽しんで欲しかったからだろう。この作品では僧のコンプレックスは結局なくならなかったことになる。芥川龍之介はこの作品で人はそれぞれだ、と伝えたかったのではないかと思う。また、芥川龍之介は一生変わり者のまま作品をつくり続けることをこの作品で表しているのではないだろうか。



『ICO -霧の城-』
宮部 みゆき 著

ICO-霧の城-を読んで

1 I 魚谷 果那

頭に角が生えた生贄の少年、イコ。霧の城の中で眠る囚われの少女、ヨルダ。二人が運命を変えることを、霧の城は許さない。宮部みゆきさんが構想に三年をかけて書かれたファンタジー小説、ICOを読みました。ストーリーは、何十年かに一人生まれる角の生えた子の、イコを主人公として始まります。頭の角は、ニエであることのまがうことなき「しるし」です、イコが十三歳のある日、角は一夜にして伸び、水牛のように姿を現しました。それこそが、「ニエの刻」なのでした。ニエの子は、生贄として霧の城の供物になる運命を背負うのです。本来なら、イコが供物としてその一生を終えるはずでした。しかし、イコの友人トトがイコを助けようとして、霧の城の呪いによって石にされた街からある本を拾ってきたのです。この出来事が、イコの運命を一変させました。イコは供物として霧の城に捧げられましたが、本に描かれていた御印が刺繍された服を着ていたおかげでニエにならずに済みました。こうして自由になったイコは、城から脱出しようと行動します。そんなとき、イコは巨大な鳥籠に捕らえられている少女を見つけます。この出会いをきっかけに、ニエの正体、霧の城の秘密が解き明かされることになったのでした。

約五百ページの大作なのですが、あまりにも物語に引き込まれたので、すぐに読み終えてしまいました。物語前半はイコの生い立ちなのですが、ここでイコがどのような男の子かわかります。さらに、イコを育てた血の繋がりのない母親がどれだけイコに愛を注いだかを知り、イコのこれからの運命を案じました。イコが霧の城につくと、城の描写がものすごく細かくあり霧の城の美しさがよくわかりました。そこに、白く美しい霧の城の囚われの姫、ヨルダの描写が加わり、雰囲気だけでも十分美しいと感じられました。そしてこの物語の中核であるヨルダの過去、霧の城の過去のお話。これは、霧の城の主である女王とヨルダが戦うのですが、女王は描写も行動もものすごく怖くて、ヨルダと一緒に震えてしま

いました。過去でヨルダは母である女王を信じてしまい、裏切られ、以来自ら霧の城の時を止め永い時を眠っていたのです。そしてクライマックス、イコの視点、現在に戻り、どうしようもない真実を知っても、ヨルダと過去にニエとなり霧の城の一部となってしまった子供たちのために、イコは女王を倒します。女王を失った霧の城は崩壊のときを迎えます。ヨルダの止まっていた時は動きだし、イコと未来を歩むのです。

この作品のテーマは「手をつなぐこと」だと私は思いました。言葉の通じないイコとヨルダは手をつないで行動していました。何度も描かれた「手を引く」という行為が私に感情移入させ、イコから城を脱出するという目的より強く「ヨルダを助ける」という想いを感じさせました。言葉の通じないもどかしさ、イコが走ると体力のないヨルダは転んでしまう、二人の差が非常にリアルでした。正門の近くで女王と対峙し、雲行きが怪しくなってきたが、それでもイコはヨルダに手を差し延べました。ヨルダと手をつなぐことで、霧の城の恐ろしい過去が見えても、イコとヨルダは手をつなぎます。「つないだ手と手に、宿る永遠。時はもう、停まっではない。時の流れにこそ、人が見出す永遠に、血のぬくもりが通って二人を結ぶ。」物語の最後の二人の様子です。手と手を取りあい、互いを認識し、温かさを感じます。登場人物は少ないけれど、人と人との愛と温もりを感じる場面がすごく多い物語でした。手をつなぐ表現をここまで美しく描いた宮部みゆきさんは素晴らしいです。

『モモ』
ミヒヤエル・エンデ 著

「モモ」を読んで

1 I 辻 郁奈

「時は金なり」-「モモ」を読んで、この言葉が頭に浮かびました。時間とは一体どういうものなのでしょうか。それを「モモ」が教えてくれました。

主人公モモは、見かけはいささか異様で、年齢も生まれも分からない不思議な子です。モモの家は円形劇場のあとです。モモは浮浪児です。彼女には不思議な力がありました。人の話に耳をかたむけると

ということです。彼女はただ黙って話を聞いているだけで、人を幸せにし、自信や希望を与えることができました。また、子供達は、彼女のところへ行くと、すばらしい遊びを思いつき、退くつすることがありませんでした。

しかし、穏やかな町に突如、灰色の男たちが現れます。人々は、彼らの巧みな話術によって「良い暮らし」を夢見、あくせくと時間を節約するようになります。そして、大人達は、今まで夢や誇りを持ち、生きがいとしていた仕事も必要最低限のことしかせず、サービス精神や思いやる心をだんだん忘れていきます。子供達は遊ぶことをやめさせられます。節約された時間は、人々に返されることはなく、灰色の男たちのもとで、彼らの生きるエネルギーとなりました。誰もそのことに気がつきません。人々は豊かな暮らしを信じて更に時間の節約をします。町は灰色の男たち、いいえ、時間どろぼうによって活気のない、灰色の町と化しました。

一方モモは、不思議なカメと出会い、時間の国へ案内されました。唯一灰色の男たちの存在を知っているモモは、そこで一人一人に与えられた時間の壮大さを目にします。そして、彼女は、人々に盗まれた時間を返すために灰色の男たちと戦います。結果、人々の元へ時間は戻り、もとの生活も取り戻すことができました。

この本を読んでいて、何か不気味な、おそろしいものを感じました。時間は大切です。少しでもたくさんある方がいいに決まっています。しかし、この物語に出てくる人々の様に、良い生活のためと時間を節約することは正しいのでしょうか。効率よく仕事をこなすことが全てなのでしょうか。そのために人々は夢や希望をもつことを忘れてしまいました。灰色の男たちは本当になくなってしまったのでしょうか。わたしは、時間を節約するということは、自分という人間を節約することと同じだと思えます。今、「時間がない」「時間のむだだ」という言葉はあちこちで飛び交っています。そういった言葉を灰色の男たちはどこかで聞いているような気がします。わたしたちの暮らしている世界では、たくさんの便利で手間のかからないレトルト食品や機械が開発されています。されらによってあいた時間はた

っぷりとあるはずですが、けれど、時間はどんどん減っていったような気がします。

時間とは一体どうゆうものなのでしょう。一言では片付けられない大きく、儂いものです。筆者はなぜこの作品を作ったのでしょうか。わたしには、この物語は、過去のお話ではなく、これからのことのように思えました。きっと時間についての人間の本当の在り方を筆者は伝えたかったのでしょうか。時間を大切に思うから時間を節約して、経済的に豊かになっても、そこには本当の人間の姿はありません。モモは時間の本当の使い方をわたしに教えてくれました。わたしだけの時間をどのように使うかを考えさせられる物語でした。

『西の魔女が死んだ』

梨木 香歩 著

「西の魔女が死んだ」

1C 加藤 豊

今の時代、僕たち高校生やその下の世代も、めいっぱい自然と触れ合い、自然の中で生活をするような体験をしたことがある人は非常に少ない。汗をかいて畑仕事をしたこともなければ、自分で採ってきた野菜や卵などで料理をして生活したりなどもある人はほとんどいない。まず、そんな生活ができる場所が限られている。食料はスーパーに行けば売っている。自然の中で遊ぶひまがあったらテレビを見たい、勉強もしなくてはならない。だが、そんな中で、少し気分を変えて、自然にとけこんで生活してみれば、いつもの生活では手に入らない、すばらしい何かが入ると、この本を読んで感じた。

この本の主人公であるまいは、中学に進んでもなく、クラスでいじめに遭い、登校拒否になる。そこで、「西の魔女」と呼ばれているおばあちゃんのもとに預けられ、ひと月あまりを過ごすことになる。そこでの生活は、摘んできた木いちごでジャムを作ったり、ラベンダーの木にふとんを干したりと、まさに自然にとけこんだ生活だった。そして、まいは、表面的にも、精神的にも大きく成長していき、学校にも通えるようになる。

おばあちゃんとの暮らしの中で、まいは魔女にな

る修行をすることになるのだが、その基本トレーニング、精神力を鍛える訓練は、早寝早起き、食事をしっかりとり、よく運動し、規則正しい生活をする、というものだった。これをするだけで、魔女になるため、そして魔女の敵である悪魔を防ぐために大切な「自分で決めたことをやり遂げる力」が強くなるらしい。この場面を読んで思ったのが、このトレーニング、僕には絶対続けられない、ということだ。簡単そうに見えるが、「規則正しい生活」をすることほど自分にとって難しいことはない。どんなに頑張っても、何日後には、誘惑に負けて、だらだらして夜更ししたり、他にすることがあるのに長々とテレビを見たりしてしまう。「おばあちゃん」が言っていた悪魔というのは、この誘惑のことではないだろうか。とすると、僕は完全に悪魔に負けてしまっている。まいが、このトレーニングを続けられたのは、自然の中で不便な点も多く、なにもかも自分の思いどおりになるわけではないという、言い換えれば、悪魔の少ない、おばあちゃんの家という環境にいたからこそだと思う。

では、魔女はどうだろう。魔女といえば、呪法を使って人に害を与える悪い奴というイメージがあったが、この本の魔女は違う。本の中で、おばあちゃんは、魔女は何でも自分で決める、また、魔女は外からの刺激に決して動揺しない、と言っている。このことから、ここで言う「魔女」は、周りの行動には左右されず、しっかりと自分の考えを持ち、なにごとにも、自分で判断できる精神力を持った人間のことなのだと思う。

「西の魔女」ことおばあちゃんは、もし死んだときは体と魂が分かれたことをまいにちゃんと知らせると言った。そして、最後の、おばあちゃんが死んで、窓に書かれたオバアチャンノ、タマシイ、ダッシュツ、ダイセイコウという文字をまいが見つけた場面で、おばあちゃんは、自分で決めたことをしっかりとやり遂げていることに気づいた。このおばあちゃんも、孫に教えた「魔女になるために大切なこと」を実行しないわけにはいかなかったのだろう。僕も、まいのように、便利な世の中から少しの間脱出して、魔女になる訓練でもしてみたくなった。男でも、立派な魔女になれるだろうか？

『15歳のナガサキ原爆』

渡辺 浩 著

無くならない戦争、忘れられゆく戦傷。

1 C 笹治 万樹

もし僕があなたに「戦争には賛成？」と訊いたら、どう答えるだろうか。多くの人は反対と答えるだろう。では、なぜ反対なのか。僕はこの夏『15歳のナガサキ原爆』（岩波ジュニア新書、渡辺浩著）という本を読んだ。戦争や原爆のことだけでなく、当時の学校生活の様子なども記されており、長崎のことを知りながら戦争の、原爆のことについても知っていくことができる。

さて、先ほどの問いの答えだが、僕だったらこう答える。「もちろん反対だが、いつ起こってもおかしくはないし、もうすでにあちらこちらで起きている。」

この著書を読みながら、現在の日本、世界と重ねてみた。そうして浮かび上がってきたのは、今も昔も変わらない、人が驕り高ぶり、都合の悪い所は隠蔽する醜い姿だった。

戦時下で外国と争う日本、領土を増やし驕り高ぶる。そしてさらに領土を増やそうとする。日本が不利になっても、それを国民に伝えようとはしない。今の日本はどうだろうか。偽装疑惑はよく浮上するし、殺人や窃盗などもいつものことである。また、それを捜査する警察側でもデッチ上げなどが行われ、隠蔽され、冤罪に至ったケースもある。こうやってみると、やっていることは変わっても、やっていることの本質は変わっていない。

さらに、これらの被害を本当に被るのは、本来なら無関係なはずの人たちである。たとえ戦時下でも、戦争が本当は嫌いな人だっていっぱいいた。偽装していないけど扱う商品が同じせいで売り上げが減る企業もある。真面目に取り調べしている警察もいるけれど、一部の不真面目な者によって悪く言われてしまうこともある。自分だけで済まないのが恐ろしい。

では、どうしたら解決できるのだろうか。理想としては、誰もが誰をも愛する世界になればいいのだと思うが、なかなかそうはいかない。出来れば苦労はしないのだが。

そこで思いついたのは、異文化とふれあうという

こと。大げさなもので言えば、留学やホームステイのようなものである。人と人との対立は、意見の食い違いから生まれるものだと思う。ところで、普段ふれないような異文化の人たちとふれあえば当然、意見の食い違いも頻発するだろう。ゆえに、そういった経験を通して、お互いを理解し、愛する心というものが育っていくと思う。

だが、本当に必要なのはもっと別のものではないのだろうか。本当に必要なもの——それは解決しようという意志と、伝える勇気だと僕は思う。

僕は今、読書感想文としてこれを書いている。だからこそ、書き終えたなら、成績に入ってしまったなら、このことは忘れてしまうと思う。そんな自分が嫌になる。だが少なくとも、これを書いている今は、伝えたいという思いはある。少しはある。本当に大切なのは、解決策を見つけることよりも、それを解決したいと思いつける意志なのかも知れない。

渡辺さんは、心から戦争の——原爆の悲劇を忘れないでほしい、来世へと伝えていってほしいと訴えている。渡辺さんだけではない、あまりに辛い過去ゆえに思い出すのが嫌で行動にすら出来ないが伝えたい人だってたくさんいる。被爆者も、もう高齢の方が多し。これからは僕たちが伝えていかなければならないのだ。

最後に、奈良高専には平和登校日や平和学習といった時間がないのが非常に残念に思えた。小中学校の頃、ずっとあったから気がつかなかったが、なくなって初めて気づくこと。

——平和学習がなくなると、平和だという感覚が鈍るということ。

『世に棲む日日』

司馬 遼太郎 著

「世に棲む日日」を読んで

2M 内宮 拓郎

僕がこの小説を読んで最も印象に残った話は、革命を実現させるには、初期、中期、後期の三段階を経る必要があり、それぞれに当てはまる能力を持った人物が必要であるという話だ。長州藩にはそれに当てはまる吉田松陰、高杉晋作、伊藤博文がいた。薩摩藩には島津斉彬、西郷隆盛がいたものの、それ

に続く人物がいなかったため、政権を作るに至らず数年後反乱を起こす事になったらしい。

「織田が搗き、羽柴が捏ねし天下餅、座りしままに食うは徳川」という言葉がある。時代は違うものの、三段階を経て新しい世を作ったという意味では同じだと思う。秀吉の生まれは農民だが、三人とも大名だ。それに対し長州の三人は藩主でなかったばかりか、直接行政に携わっていたわけでもない。

松陰は罪人だった。自宅謹慎となった松陰は粗末な小屋に松下村塾を開き、死罪になるまでの三年足らずの間に、明治維新の原動力となる何人もの英傑を生み出した。松陰がしたのはここまでだ。武力に頼るわけでもなく、若者達を相手に自分の思想を伝えただけだ。この時代は様々な思想が入り乱れていた。開国か攘夷か、佐幕か倒幕か。だからこそこの時代はおもしろいと思うし、だからこそ松陰の元に集い、刺激し合い、団結し、新しい時代を切り開くことができたのだと思う。僕はこれまでたくさんの歴史小説を読んだが、戦国時代にしても、幕末にしても、その醍醐味は武力による戦争の場面だと思っていた。でもこの本を読んで、また新しい面白さを発見できたように思う。そして松陰が処刑された後、松下村塾へ通った若者達は攘夷運動へと動き始める。英国公使館焼き打ち、外国船への発砲等、藩をも巻き込んでいくのだ。さらに京での政変により失った勢力を回復するため、京へ武力乱入し、壊滅。追い打ちをかけるように幕府は長州征伐を開始する。やがてその重圧に耐え兼ね、新しく佐幕政権が成立する。それらを俗論党と呼び、立ち上がったのが高杉晋作である。わずか八十人と言う人数で挙兵したのだが、奇兵隊や民兵部隊を味方につけ、ついには政権をひっくり返したのだ。その後幕府は再び長州征伐の兵を挙げるが、時運は既に移り変わっており、高杉らの活躍により長州は勝利を重ねていった。そして、維新の扉が開きかけたその時に、高杉は肺結核に倒れた。二十八歳という若さでこの世を去った。「おもしろき、こともなき世を、おもしろく」高杉の辞世の句だ。僕は俳句や短歌はあまり詳しくないけど、短い生涯を夢中で駆け抜け維新の扉をこじ開けた、高杉の破天荒人生、生き方が真っすぐに伝わってくると思う。蛇足ではあるが、下の句は息が切

れて作れなかったらしい。そこで近くにいた野村望東尼という歌人が、「すみなすものは心なりけり」と下の句を詠んだそうだ。

高杉が死んだ後も快進撃を続けた新政府軍は、江戸城を開城させ北上し、ついに五稜郭で戦いに終止符を打った。新政府の幹部の中には松下村塾に通った者も多く、伊藤博文や、奇兵隊総督山県有朋らは首相にも就任し、日本の近代化に大きく貢献した。

この本は新政府側からの視点で描かれた話だったが、松陰を処刑した井伊大老も、最後まで戦った新撰組等の幕府軍も皆、国を思う気持ちは同じだったと思う。国を思うから衝突し、強く思う程、大きな衝突となる。国の危機を好機に変え、大きな成長のきっかけとできるかどうかは、いかに国を思い、いかに衝突するかが大切なのだと思う。

最後に、萩という町は不思議な所だと思う。幕末に多くの英雄を生み出しただけでなく、現在でも多くの政治家を生み出しているらしい。一度自分の足でこの町を訪れてみたいと思った。

『老人と海』

ヘミングウェイ 著

「老人と海」

2E 合澤 和之

僕がこの「老人と海」についての読書感想文を書くのは、実はこれで三回目である。しかし、読むたびに僕が受ける感動は前に感想文を書いたときのそれとは異なり、前回よりもその前よりも心を振るわせた。一体、ヘミングウェイは「老人と海」で何を伝えたかったのか、自然の厳粛さ・人間の勇気・人間の生命力・人間の弱さ・人間の強さ・自然の摂理・それぞれの生命の運命。色々と思い浮かんだ、しかし、これらが作者の伝えたかったことなのかどうかは決してわかるわけがない。もしかしたら作者は何かを伝えるつもりで「老人と海」を書いたわけじゃないかもしれない。けれどそんなことは彼自身しか知らないことだ。しかし、この本には僕が求めて止まない何かがあることがわかった。なぜなら三回目の感想文を書くためにもう一度その本を読んだときに、自然と目が潤み、今にも涙がこぼれそうになったのである。僕自身本を読んでいて涙を流すことは

そう多くない、しかし、この本は気づけば目に涙がたまっていたのである。なぜかはわからない、おそらく僕が求めて止まない何かに気がついたからかもしれない。いつかそれがわかる日がくれればいいと切に願う。

僕はなんとなくだが、この「老人と海」に登場する老人と僕が若干似ているような気がしたのだ。たとえば、この本の本文の六割くらいが、実はこの老人の自問自答や何かの考え事で構成されている。この老人は何か無意識のうちに考え事をしているようで、その度に自分に話しかけているのだ。僕自身も暇があれば考え事をし、また、気がつかないうちにそれをしていることもある。もしかするとこの癖は過去に「老人と海」を読んだことが原因かもしれない。まあこの癖は気に入っているので問題はないが。また、この老人は人間以外のもの—それはときに鳥であったり、海であったり、飛魚や海豚、風であり、そしてもちろん巨大なカジキマグロであったりする—を友達と言い、あるいは兄弟と呼ぶ。老人は、「鳥や獣のすごいやつにくらべると、人間なんてたいしたものじゃないからな。」と言ったりしている。まったくもって同感である。人間なんてものは少し利口なだけで、その利口なゆえに良くないことを考えるものなのだろう。決して全ての人間が悪いというわけではないのだろうが、老人の言うように人間以外のものと友達や兄弟になることができたらどんなに良いことだろうか。

最後に、僕が印象に残った老人のセリフを書きたいと思う。「運が向いてくれば、用意はできてるってゆうものさ。」「機会はそのたびごとに新しい。昔の手柄など、老人はもはや考えていない。」「いいことは長続きしないものだ。」「人間は負けるように造られてはいないんだ。」「お前は漁師に生まれついたんだ、魚が魚に生まれついてくるようになる。」どれもこれも僕に共感を与え、勇気を出してくれる。個人的に一番印象に残っているのは最後のセリフだ。孔子の「論語」にとると、天命を知るのは五十になってからだそうだ。僕が僕に生まれついた意味を知るのが待ち遠しい。

『夢をかなえるゾウ』

水野 敬也 著

「夢をかなえるゾウ」を読んで

2E 西村 佳那子

ガネーシャは突然、主人公である僕の前に現れた。そして、『ガネーシャ式』で、自分を変えたい、成功したいと願う僕を変えてくれるというのだ。

この本がベストセラーになる少し前に、私はこの本と出会った。新聞の広告で見たとき、「読みたい!」と思ったのだ。私は買って帰ったその日のうちに一気に読み切った。面白すぎたのである。けれど、この本は面白いだけではなかった。多くの偉人たちの名言、ガネーシャの放ったとてもためになる言葉…それと、ガネーシャの渾身の冗談と主人公のツッコミ…全てが心に残るものであり、忘れられない本となる理由になった。

ガネーシャはゾウの姿をした、関西弁で話す、あんみつの好きな神様だ。そんな神様は、あの有名なニュートンや、松下幸之助、本田宗一郎、ダーウィン、アインシュタイン…、などのたくさんの偉人たちを育てたという。これに対し作中で僕は「冗談はやめてください」と言った。信じていなかったのだと思う。私も嘘だ!と思った。でも、ガネーシャは夢をかなえるゾウなのだ。

ガネーシャが一番始めに僕に出した課題は、『靴をみがく』だった。たったそれだけのことだ。それが成功に繋がると誰が思うだろう。主人公も半信半疑で出された課題をこなした。そうして、次に出された課題は、『コンビニでお釣りを募金する』だった…。

一見、誰にでも出来そうなシンプルな課題である。「私にも出来る」、私も始めはそう思った。しかし考えてみると、自分の革靴をいつも綺麗に磨いてくれるのは母であったし、募金は何故か恥ずかしく思ってしまった、自分の財布からは一度もしたことがない気がする。当たり前だと思ってやっていたことが当たり前ではなく、私がガネーシャに出会うきっかけとなった新聞の広告と同じ様に載っていた募金に関する広告は、サッと目を通しただけだったのだ。

ガネーシャは人の心が読める。人の考えていることは、ほとんどが自分のことだという。ガネーシャ曰く、『自分にベクトル向きすぎ』という状態なのだ。自分のことばかりになると、他人は本当に他人になってしまう。他人のために思って行動し、それを自分の喜びとする。ガネーシャ方程式はこうだ。『人の欲を満たすこと = 自分の欲を満たすこと』。これは、とても難しいことなのかもしれない。どう頑張ってみても、自分は自分であって、それを变えることは出来ない。自分自身の欲を一番よく理解しているのは自分なのだ。だから、人のために思ってとった行動が、必ずしも自分のためになるとは限らない。けれど実行に移さずに思案しているだけでは、開かない扉や見えない道が減ることはないのだ。

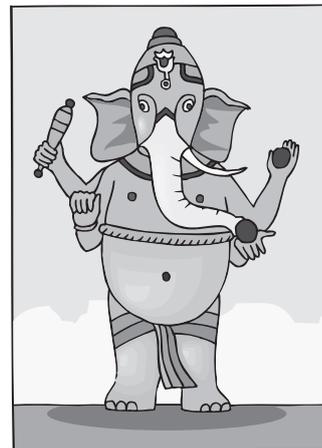
最後にガネーシャはこう言った。

「成功だけが人生やないし、理想の自分あきらめるのも人生やない。ぎょうさん笑うて、バカみたい泣いて、死ぬほど幸福な日も、笑えるくらい不幸な日も、世界を閉じたくなるようなつらい日も、涙が出るような美しい景色も、全部全部、自分らが味わえるために、この世界創ったんやからな。」

そして、こう言った。

「世界を楽しんでや。心ゆくまで」

この本を読んで、今まで生きてきた時間の中で見てきたものが、全く違う見え方をするようになった。自分が楽しいと思えることを大切にしながら毎日を歩んでいきたい。そして、「ありがとう」とどんなものにも言えるように、いつでも感謝の気持ちを忘れずにいたい。私の隣にガネーシャは居ないけれど、まずは『靴をみがく』ことから始めようと思う。



『キセキ』

海 著（携帯小説）

「キセキ」を読んで

2 I 里中 沙矢香

まだ小さい頃に、ぬいぐるみが大切だと言った私に、父が怒ったのを覚えている。そして、父が鞆の中から出して、私に見せてくれたもの、それは私と妹の写真だった。父の大切なものはこの写真、つまり私と妹だと言っていた。あの頃の私に言っても、分かるわけがない。だけど、今なら分かる。ぬいぐるみよりも、家族が大切だということが。

両親に捨てられ施設に預けられた、家族嫌いな凧。施設にいる自分と同じような境遇の子供達と、何度もぶつかり合って、何度も一緒に乗り越え、本当の家族のように過ごしていく中で、家族の大切さを知っていくという小説である。

この小説を読んで、大切なものに気付くことができた。生まれたときからずっとそばにあって、なくなるなんてなかったもの。一番身近な存在。だからこそ、気付いていなかった。家族の大切さというものに。家族がいるなんて当たり前だと思っていた。だけど違った。凧たちのように、本当の家族がない子だっている。家族がいても、家族嫌いな子もいる。だからこうして、大好きだと言える家族と一緒に居ることができる。それは、とても幸せなことだと思った。

この小説で、一番印象に残っているのは、凧の家族であるリナが、本当の家族を失ったという話だった。リナは凧と違い、家族が大好きで、家族皆、仲が良かった。そんな家族が一瞬にして奪われた。それは、計り知れないほどの悲しみだろう。大切なものは失ってから気付く。それは何故だろうか。それは、大切なものほどこそ、身近にあり、当たり前だと思っているからだ。家族がいることも当たり前。もっと言えば、今、目が見えることも当たり前だと思っただろうか。それは決して、当たり前なことではないのだ。家族がいる、目が見える、それらは当たり前ではなく、すごく幸せなこと。この世に当たり前なものなど、何一つとしてないのだと私は思う。

ありがとう。私の父があなただ、母があなただ、

そして私の妹があなただよかった。あなた達が私の家族で本当に良かった。何でもできるのに、不器用で、まったく素直じゃない父。勉強はまったく出来ないけど、大切なことたくさん知っていて、教えてくれる母。普段は生意気で可愛くないけど、いつも楽しそうにいろんなこと話してくれる妹。そんな家族が大好きです。普段、恥ずかしくて絶対に言えないけど。嘘だと言われそうだけど。大好きだよ。そして、これからもよろしくお願いします。

大好きだと言える家族がすぐそばにいる。それは、とても幸せなことだ。この小説を読んで、何かが変わった気がする。家族皆で笑い合えた。たったそれだけのことがすごく嬉しく感じるようになった。そんな何気ない、当たり前だったことが、今は輝いて見える。

凧たちが、何度もぶつかり合って、何度も乗り越えて来たように、私も家族と一緒にぶつかり合って、乗り越えていこうと思う。永遠にはないこの時間。それを大切に。1日1日噛み締めて、精一杯生きて行きたい。大切なものを失ってから気付くのではなく、失う前に気付いて。その人達との日々を大切に。泣いた数以上に笑えるように。

『ICO -霧の城-』

宮部 みゆき 著

「ICO」を読んで

2 I 山口 浩基

この本の題名は、ICO と書いてイコと読みます。テレビゲームが原作なのですが、有名作家である宮部みゆきさんがそのゲームの大ファンで、彼女自らノベライズを希望し、一冊の本として出版されました。

さて、友人の奨めでICO を購入した僕ですが、原作のストーリーについては、ほとんど何も知りませんでした。ただ、「美しく幻想的な世界観」という、抽象的な評価を耳にしていただけです。

小説版ICOのあらすじはこうです。

「邪悪な力を持つ霧の城は、角の生えた子を生贄として求めていた。主人公イコはしきたりに従い、霧の城へ。そこで檻に囚われた少女を発見したイコは、彼女を助け出そうとするが……」

一見すると、どこにでもあるようなファンタジーだと思えるかもしれませんが。しかも原作には明瞭なストーリーが定められておらず、著者がノベライズするにあたって、脚色をした結果がこれであるというから驚きです。

しかし、僕は読み進めていくうちに、その認識をすっかり改めました。緻密な情景描写や、細かな設定、宮部みゆきさんならではの、場面々々にぴったりの比喩。現実には有り得ない幻想的な風景が、目に浮かんでくるようでした。また登場人物の心理描写も巧みで、滑らかに感情移入することができました。読了後は、とてもこの本のあらすじが四行程度で済むとは思えませんでした。

ストーリーは、四つの章で構成されています。第一章が世界観の説明、第二章がイコの旅立ちと霧の城での少女との出会い、第三章が少女・ヨルダの追憶、第四章が、イコとヨルダの冒険の結末を描いています。

第一章で数多くの人物が登場するのに対し、第二章からはイコの孤独な冒険が描かれます。生贄として霧の城に置いてきぼりにされたイコは、故郷に帰りた一心で広大な城を探索し、檻に閉じこめられた少女、ヨルダと出会います。二人は言葉が通じません。でも、イコはヨルダと手を繋ぎ、行く手を阻む影の化物を退けつつ、ともに霧の城から脱出することを決意します。

この物語の凄いところは、イコとヨルダの表面的な意思疎通がほとんどないにも関わらず、互いが互いを理解しあっているところです。時には城の探索を忘れて外界に興味を示し、時には影の化物にさらわれ、時には疲労を訴えるヨルダ。イコは何度となく、彼女を「足手まといだ」と思ったことでしょう。それでも、イコは決して、彼女の手を離すことはありませんでした。

終章の冒頭、ヨルダの辛い過去を知ったイコは、へたり込んだ彼女にこう言います。

「今度は――僕が君を守ってあげるからね。一緒にこの城を出て行こう。必ず、必ず、二人で手をつないで出て行こうよ、ね」

僕がこの本を読んで、一番印象に残った科白がこれです。なにもかもが上手くいく理想の未来を、言

葉にして断言するのは、とても勇気のいることだと思います。簡単だと言う人もいるかもしれませんが、少なくとも僕は難しいと思います。しかしイコは、ためらいなく自分の意志をヨルダに伝えました。たとえ言葉が通じていなくても、心は通じているという自信があったからです。そしてその自信が、後々、イコの力の源になっていきました。

結局、エピローグに至っても、イコとヨルダは一言も言葉を交わすことはありません。読み始めの頃、僕は二人の間に会話がないことにもどかしさを感じていました。でも、いつしか僕は、それでも構わない、と感じるようになっていました。

人と人の思いの遣り取りに、言葉は必需品ではなく、些細な仕草や表情だけでも、もっと言うなら、手をつなぐだけでも、相手の機微を察することは可能なのではないのでしょうか。ICO という作品は完全なフィクションですが、イコとヨルダの触れ合いを通して、その可能性を表現していると思いました。

最後に、僕はICO を、忙しい人にこそ読んで欲しいです。原作の世界観を、この本は壊すことなく、そのまま受け継いでいると思います。電車に乗っているときや、仕事や勉強の小休止に読めば、ICO の物語世界に癒されること請け合いです。是非、一度手に取ってみてください。



学生会図書委員による

ブックガイド



英語を読む

4 S 宮川 慎之介

私は小説についてあまり頻繁に読む方ではありませんが、新聞や英語の本はよく読みます。ですので、図書館にある英語の本について紹介したいと思います。

図書館の入り口入ってすぐの左のところに新聞コーナーがあります。そこに英字新聞が何種類かあったと思います。私は読めない部分は考えてもしょうがないので読み飛ばし、忙しいときは見出しだけざっと眺めます。また1階の雑誌コーナーにある週刊 TIME も話題ごとに短めで読みやすいと思います。

1階の雑誌コーナー隣の本棚には米国版の“The Prince of Tennis”（テニスの王子様、写真のもの）が並べてあります。教科書の Genius と比べるとかなり易しい英語ですのでぜひ一度読んでみてください。また、“Dragon ball Z”（ドラゴンボール Z）もそこにあります。

最後に、前回11月にブックハンティングで新しく購入した短く読みやすい本を羅列しておきます。

- 1) Bushido : the soul of Japan (新渡戸 稲造)
- 2) Ghosts (Auster Paul)
- 3) City of glass (Auster Paul)
- 4) The Locked Room (Auster Paul)
- 5) Kokoro (夏目 漱石)
- 6) 源氏物語夕顔 (Varnam - AtkinStuart)



速読記憶術のすゝめ

～成績もグイグイ上がる？～

1 C 笹治 万樹

速く読むこと、速読。熟練を積んだ者の中には分速10万字という驚異的な速度で文字を読むことができる人もいるのだとか。一般的な人の読書速度は分速400～600字程度と言われているのだから、これがいかに凄いことかわかりだろう。勿論、速く読むだけではない。しっかりと記憶として頭の中に残しているのだからなお驚きである。

さて、そんな速読術は決して特別な人たちだけのものではない。我々常人も、ちょっとした練習をしていけば、分速10万字とまではいかなくとも、分速数千字程度ならば十分に到達可能である。そこで今回紹介させてもらうのは『王様の速読術』（著：斉藤 英治）と、『あなたもいままでの10倍速く本が読める』（著：ポール・R・シーティ、訳：神田昌典）だ。なぜこの2冊を選んだのかというと、奈良高専の図書館にも置いてある本だからである。

前者の本は借りようと思った時ずっと貸し出し中であつたため、残念ながら未だ私は読んでいないが、通販サイト Amazon での評価も非常に高く、その内容には期待が持てる。借りられる機会を見つけたら、是非一度、借りてみてほしい。

一方、後者の本は冬休みに借り、家で読んだ。感想としては、速く読むことよりも、記憶として残す（というより要点をつかむ）ことの方に重点が置かれていると感じた。勿論これは重要なことで、先程も述べたように速く読むだけでは意味がないことであり、要点をつかみ記憶すること、これが肝である。この本は小説などをじっくり味わって読むといった読み方には向かないかもしれないが、勉強等において真価を発揮しそうなので、学力向上を目指す方、少しでも勉強に割く時間を減らしたい方は試してみるといいだろう。

個人が有する時間というものには有限であり、その中でしなければならぬ嫌なこともする必要もある。もし、それを短時間でこなすことが出来るならば、より多くの時間をしたいことにあてることができる。また、したいことも、速く、効率的に行えるようになればより楽しむことができる。この機会に是非、速読記憶術に挑戦してみてはどうか。

図書委員会活動報告

図書委員会では年2回の「ブックハンティング」（大型書店に出向き、数多くの本を実際に見て、図書館に並べてほしい本を選ぶ行事）を、また、秋の読書週間行事として図書館での展示などを行っています。

皆さんも来年度は図書委員になってみませんか。

ブックハンティング（11月15日 於：ジュンク堂大阪本店）



毎年だいたい6月と11月に実施しています。
事前に各クラスで購入希望図書を募っていますので、お勧めの本があればぜひ図書委員まで。
また図書館でも購入希望図書の申込を随時受け付けています。



購入した書籍の一部です。
図書館で受け入れ作業をした後、書架に並びます。
皆さんもぜひ利用してください。

読書週間行事（10月27日から11月9日まで 於：本校図書館）



今年度は「有名人の書籍紹介」というテーマで、タレントやノーベル賞学者、その他有名人の書いた書籍を図書館入口に展示しました。



編集後記

奈良高専創立45年目にして本校図書館の蔵書登録冊数が、10万冊を超えました。小さな図書室であったとき、10万冊はとても大きな数字でした。

傷んだ本や既に役割を終えた本などに歴史を感じながらも、利用者のニーズにあった図書の充実と利用しやすい図書館を目指して、これからも頑張ろうと張り切っています。ますます充実していく本校図書館、今後とも皆様の一層のご利用をお待ちしています。（図書館）

奈良工業高等専門学校 図書館

〒639-1080 大和郡山市矢田町22

TEL 0743-55-6015

URL <http://www.nara-k.ac.jp/jimu/library/>



この冊子の印刷には、環境に優しい大豆油インキを使用しています。